

古代苑池小考
—古墳時代の「水のまつり」の場から日本庭園へ—

青 柳 泰 介

目次

I . はじめに	55
II . 古墳時代の「水のまつり」ー古代苑池のベースとしての湧水点祭祀場（導水施設）ー	55
III . 飛鳥時代の苑池ー苑池の誕生ー	56
IV . 奈良時代の苑池ー苑池の変容ー	58
V . おわりにー日本庭園への道程ー	60

論文要旨

本稿は、飛鳥時代の苑池が、古墳時代の「水のまつり」のうち、磐座をともなう甘南備型の山から流れ出る水を用いて儀礼を執行した湧水点祭祀場（導水施設）をベースに、韓半島（百済）の苑池を受容して成立した可能性を説いた。いずれも祭祀遺物と生産関連遺物が出土するという共通点がある。その苑池は、地域統合・開発の象徴であった古墳時代の祭祀施設を、新たな時代の権力行使の装置として、外国から導入された施設のベースに取り込むかたちで成立したと考えられる。その池のかたちは、一部で「曲池」を含むものの、「方形池」が多く、護岸は垂直な石積みが多くみられた。

一方、奈良時代の苑池は、直接中国（唐）の影響が想定され、祭祀目的よりも宴遊目的が大きくなっていくが、飛鳥時代の苑池から漸移的に変化したことが想定され、古墳時代以来の伝統をベースに新しい要素を順次積み重ねていって成立したと想定した。特に、甘南備型の山・磐座は、飛鳥時代では古墳時代同様、苑池の外側に存在していたが、奈良時代にはそれらを築山・景石として、苑池空間に取り込んだ可能性を想定した。それにより、古墳時代の広大な空間は、苑池という限られた空間におさまることになった。なお、池のかたちは、ほぼ「曲池」に限定され、護岸もなだらかな洲浜状の石敷きに取れんしていった。

その後も、苑池は次々と新しい要素を積み重ねていって変容を続け、日本庭園へと発展していったが、その独特の様式の要因は、古墳時代以来の甘南備型の山・磐座・湧水点祭祀場（導水施設）をベースにしていたからではないかと想定した。

青柳 泰介（あおやぎ たいすけ）

奈良県立橿原考古学研究所 学芸副主幹兼係長

I. はじめに

筆者は、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館令和4年度秋季特別展『宮廷苑池の誕生』展を担当したが、そこで古代苑池¹⁾の誕生に古墳時代の「水のまつり」、特に湧水点祭祀場（導水施設）が深く関わっている可能性を説き、かつそれが古代を通して苑池のベースをなしたと想定した（青柳編2022）。本稿では、展示で十分に説明できなかったことについて、補足したい。なお、苑池については庭園史を中心として先学の研究が多数あるので、適宜参照していきたい（本中1994、金子2002、小野2009、卜部編2012、穂積2012など）。

II. 古墳時代の「水のまつり」—古代苑池のベースとしての湧水点祭祀場（導水施設）²⁾—

古墳時代の「水のまつり」については様々なかたちがあるが、大規模なものには「導水施設」がある。それは大きく以下の2種類に分けられる（青柳2003）（表1・2）。

1. 湧水点から導水するパターン（湧水点祭祀、導水施設B類）、
2. 貯水池から導水するパターン（槽付木樋³⁾を使用、流水祭祀、導水施設A類）

1. は城之越遺跡（三重県、古墳時代前期）、2. は南郷大東遺跡（奈良県、古墳時代中期）を典型例とする（図1）。詳細は前稿を参照してほしいが、両者とも古墳時代に大規模化し、1.の方が先行して発達したことが想定される（青柳2003）。

また1.は、湧水点（貼石や石敷を伴う場合がある）、導水溝（貼石や石積を伴う場合がある）、突出部（石組や立石を伴う場合がある）からなり、突出部周辺の広場で祭祀を実修した可能性があり、開放的である。

一方の2.は、貯水池（古墳時代前期は板組護岸、中期は石貼護岸を伴う場合がある）、槽付木樋（槽と樋を組み合わせる場合あり、周囲に覆屋・垣根を伴う場合あり）からなり、槽付木樋周辺で祭祀を実修した可能性があり、閉鎖的である。

なお、地域内で範囲を限定すると、両者は別個の存在のように想定されているが⁴⁾、地域全体を見渡すと、1.湧水点→2.槽付木樋が同一流路上でつながる可能性が

ある（青柳2021）。葛城地域の事例では、甘奈備型の王山（金剛山のピークの一つ、山頂に磐座ありか）の山麓（式内大社の高天彦神社周辺か）から水が流れ出し（1.）、南郷大東遺跡の槽付木樋（2.）を経由して、下流の葛城川流域の農耕地帯を潤すという、葛城地域集団の地域開発・統合の構図が垣間見られ、そこに2種類の導水施設が重要な役割を果たしたと考えられる。

また、両者の出土遺物を比較すると、祭祀遺物以外に土錘や鍛冶関連遺物などの生産関連遺物が若干含まれることに注目しておきたい。両者は遺構の構造は違うが、出土遺物には共通点が多いと言えよう。

ちなみに、古代苑池との関係は、1.では湧水点や導水溝に貼石や石積を伴う例（城之越遺跡、南紀寺遺跡など）、中島が存在する例（南紀寺遺跡など）、導水溝の合流部などに立石や石組を伴う例（城之越遺跡など）、2.では貯水池に貼石を伴う例（南郷大東遺跡、神並・西ノ辻遺跡など）等にデザイン状の共通点がみられるが、今見てきたように、1.の方に共通点が多くみられる。

一方、「水のまつり」以外で古代苑池とデザイン状の共通点のある水にまつわる施設には以下のi～iiiがある。

- i 周濠に方形出島状遺構・中島を伴う大型古墳⁵⁾（巢山古墳、津堂城山古墳など）、
- ii 方形にめぐる石貼の濠を伴う王宮・豪族居館（脇本遺跡、極楽寺ヒビキ遺跡など）、
- iii 中島を伴う大型貯水池（東池尻・池之内遺跡など）

なお、iの巢山古墳の出島状遺構のコーナー部やiiの極楽寺ヒビキ遺跡の方形区画のコーナー部には立石がみられ、性格の違う遺跡同士にデザイン状の共通点がみられることが注目される。ちなみに、立石は1.の城之越遺跡の湧水点祭祀場における導水溝の合流部（突出部）でもみられる。

以上のように、古墳時代の湧水点祭祀場を中心とした水にまつわる施設におけるデザイン状の共通点が、古代苑池に引き継がれた可能性があろう。なお、上記施設は直線基調である場合が多いが、城之越遺跡の湧水点祭祀場のように、曲線基調の施設が含まれることにも注意しておきたい。

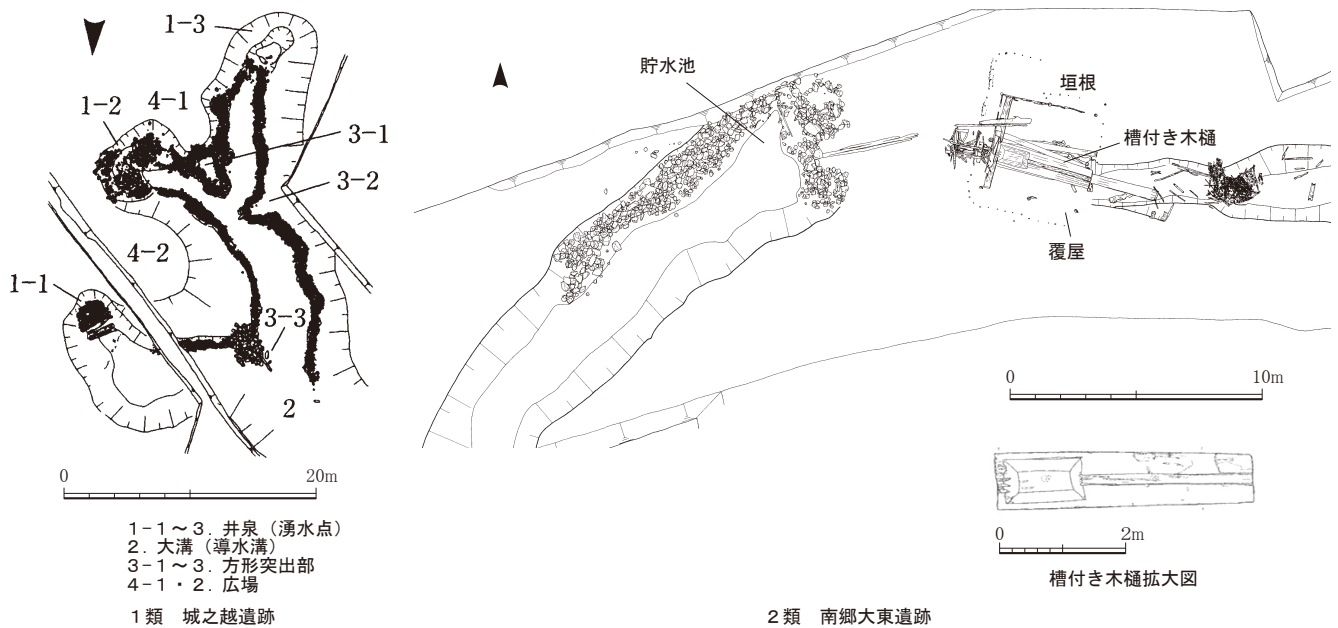


図1 古墳時代の導水施設

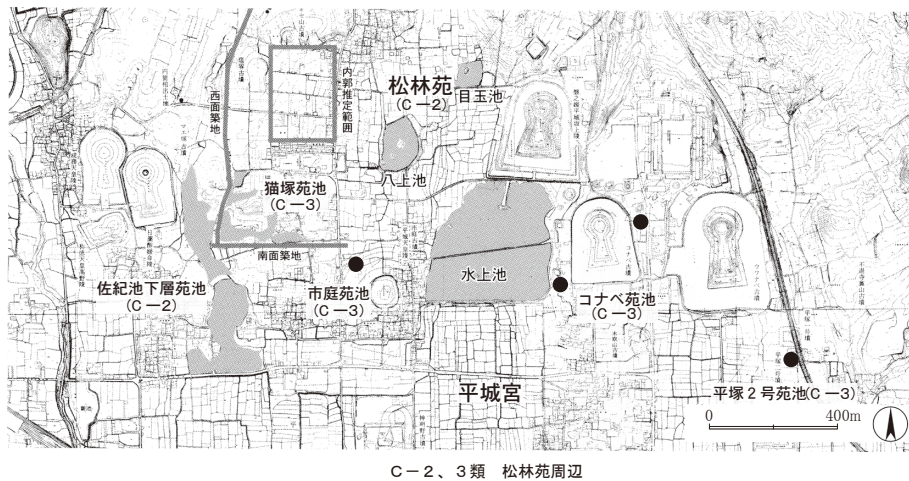


図2 古代苑池（その1）

Ⅲ. 飛鳥時代の苑池－苑池の誕生－

中国に秦漢帝国以来の強大な世界帝国が再び出現し、その余波が東アジア世界全体に波及して、極東の韓半島や日本列島も嫌が応にも巻き込まれつつあったとき、ヤマト（倭）王権は古墳を核とした緩やかな連合体制から律令を核とした強力な中央集権体制へと漸次移行していった。その過程で、その権力行使の舞台装置の一つとして、「苑池」が出現したと思われる。

それは、中国の苑池を韓半島の百濟経由で間接的に受容した可能性が高い⁶⁾が、ベースのデザインには古墳

時代の水にまつわる造形を採用し、さらに古墳時代の地域開発・統合の象徴の一つでもあった湧水点祭祀場を核とする導水施設をも取り込んだと考えられる。

また、我が国最初の苑池は飛鳥京跡苑池になる可能性が高いが、それは飛鳥の宮殿のすぐそばに造営されたので、「宮廷苑池」の誕生でもあった。

では、最初の苑池である飛鳥京跡苑池とはどのような施設だったのであろうか。以下に概要をまとめる。なお、詳細については報告書や先学の研究を参照してほしい（ト部編 2012、鈴木一議 2022 など）。

それは南池と北池からなり、水の流れは、飛鳥川ある

いは湧水（給水）→南池→渡堤（暗渠木樋）→北池→水路（石溝）→飛鳥川（排水）になる。周囲は掘立柱塀で囲まれ、東側では門も確認された。7世紀中葉の斉明朝に成立し、7世紀後葉の天武朝に大規模改修された。文献では、『日本書紀』天武天皇14年（685）11月6日条の「白錦御苑」に該当する可能性が想定されている（卜部編2012）。

- ① 形状は直線を基調とする幾何学形を呈する⁷⁾。南池は不整五角形、北池は不整台形になる。
- ② 垂直な石積護岸を有する。特に、南池の東岸は高さ3.5 m以上の直立した壁のようである。
- ③ 大型石造物（南池）を配置している。特に、給水部では「流水施設」3石、「石槽」1石がみられる。
- ④ 中島（南池）がある。楕円形の積石塚状のものと、アメーバ形の石積護岸をもつもの（改変時に大きくなる）がみられる。
- ⑤ 湧水点（北池）を取りこんでいる。石組柵（湧水点）→石組溝→石敷の石組柵→石敷の石組溝という導水施設を伴う。なお、湧水点の正面に見えている甘南備型の岡寺山に磐座があることは注目される。
- ⑥ 南池の東南方の一段高い場所に建物群がある（観賞用施設か）。
- ⑦ 南池内の護岸と中島の周囲には木造の棧敷状施設や舞台状施設が構築された（改修時に撤去された）。
- ⑧ 奇禽珍獣の存在は動物遺存体にはみられなかった。
- ⑨ 植栽は、南池内にハス、中島上にマツ、岸辺にセンダン、モモ、ウメ、ナシなどが植えられたようだが、珍奇な植物はみられない。
- ⑩ 出土遺物については、飛鳥時代のものもあるが管理が行き届いていたため少なく、大部分は池が埋没する奈良～平安時代のものである。

少ないとはいえ、飛鳥時代の遺物には、木簡（苑池関係の役所、豪華な食材、最先端の漢方薬などの記述のある重要な内容を含んでいる）、瓦、土器（墨書、刻書を含む）、祭祀遺物（人形、舟形、刀形、鳴鏑、琴柱、下駄など）、木面、生産関連遺物（鞆羽口、砥石、ガラス埴塼、漆入りの小型須恵器壺、土錘など）、鉄製品（海老錠、鉄鏃、鉄刀子など）、水晶玉など地味だが多彩な遺物を含む。

- ⑪ 神仙世界や仏教などの新来の宗教的要素については、顕著な遺構・遺物を確認できないが、強いていえば、南池で確認されたハスの痕跡であろうか。

上記苑池で何をしていたかについては、具体的なことは分からないが、出土木簡の食材に関する記述や食器（土器）などの存在から、その機能の一つに饗宴・観賞の可能性が想定されている（卜部編2012、鶴見2022など）。

また、わずかに出土した祭祀遺物・生産関連遺物や、北池の湧水点（導水施設）等から、古墳時代以来の儀礼もおこなわれた可能性がある（青柳編2022）。

一方、木面が出土しており、「川原寺」銘刻書土器の存在とともに、『日本書紀』朱鳥元年（686）4月13日条の川原寺の「伎楽」を彷彿とさせるので、南池の「舞台」を利用して伎楽を催した可能性も想定されている（重見編2014）。

このように、北池と南池は構造が違うだけでなく、性格・役割も違った可能性がある。北池は湧水点祭祀などを執行した伝統的性格⁸⁾、南池は伎楽などを挙行し、古墳時代にはみられない大型石造物を配置するなど革新的性格を担った可能性があり、我が国初の苑池にふさわしい内容を有しているといえるかもしれない。

なお、大型石造物や石積護岸を擁する池は壮観だが、やや華やかさに欠けるのは、古墳時代以来の静謐で伝統的な儀礼がベースにあったからであろうか⁹⁾。

次に、飛鳥時代の他の苑池をみていくと、現状では14遺跡で確認されており、そのうち10遺跡が飛鳥地域に集中している（卜部編2012）。特に、平田キタガワ遺跡と酒船石遺跡を除き、飛鳥川流域に位置していることが注目される。飛鳥地域以外では桜井の上之宮遺跡、吉野の宮滝遺跡、宇陀の中之庄遺跡、東北地方の郡山遺跡があるが、ほとんどが奈良盆地南部の事例である¹⁰⁾。

それらは「方形池」と「曲池」に分けられるようだが（相原2002、卜部編2012、鈴木2022など）、前者の方が多い。よって、先述したように、百濟からの影響が想定されるが、池の形状の差をこえて似たような構造の苑池が存在することに注目しておきたい。

その構造から以下のように分類する（表1・2、図3）。A類・湧水点（導水施設）一池からなるパターン。

A-1類・湧水点一池のパターン。類例は、宮殿付属施設である飛鳥京跡苑池、酒船石遺跡¹¹⁾、

前期難波宮北西水利施設？など。

A-2類・小池一池のパターン¹²⁾。類例は、離宮と想定される島庄遺跡、宮滝遺跡など。

A-3類・小池一石敷のパターン¹³⁾。類例は、居宅と想定される古宮遺跡、上之宮遺跡など。

B類・池単独のパターン。類例は、飛鳥宮跡、石神遺跡、平田キタガワ遺跡、坂田寺跡、郡山遺跡？など¹⁴⁾。

なお、上記事例はいずれも飛鳥京跡苑池ほどの情報が内包してはいないが、いくつかの重要な情報がみられる。先述の飛鳥京跡苑池の特徴である①～⑩と比較すると、共通点は多い。相違点としては、①については一部で曲地がみられ、②については一部で貼石護岸がみられ、⑦については現状でみられず、⑩については酒船石遺跡の亀形石槽、古宮遺跡の蓮華文磚、石神遺跡の須弥山石や坂田寺の方形池？などが挙げられる。

このように、飛鳥時代の苑池については不確定要素が多いものの、現状の類例は飛鳥地域を中心とし、奈良盆地南部に類例が集中するが、それ以外の地域でも官衙・居宅周辺でみつかると可能性は残される。

なお、古墳時代の湧水点祭祀場（導水施設）との関係性については、否定的な見解もあったが（金子2002など）、飛鳥京跡苑池北池での湧水点（導水施設）の確認以降、正面に磐座を伴う甘南備型の山の存在も含めて、関係性が急速にクローズアップされてきた。特に、両方で祭祀遺物や生産関連遺物が出土していることなどは、その蓋然性を高めてくれよう。

よって、飛鳥時代の苑池は、東アジアにおける先進の権力行使の舞台装置を、伝統的な湧水点祭祀場を中心とした古墳時代の水にまつわる造形をベースに成立したことが想定された。そこでは伝統的な湧水点祭祀などと、新来の神仙・仏教儀礼、伎楽、饗宴などの新旧の儀礼・行事等を執行したと考えられる。

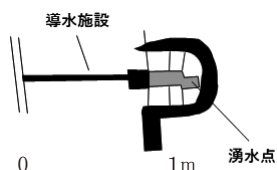
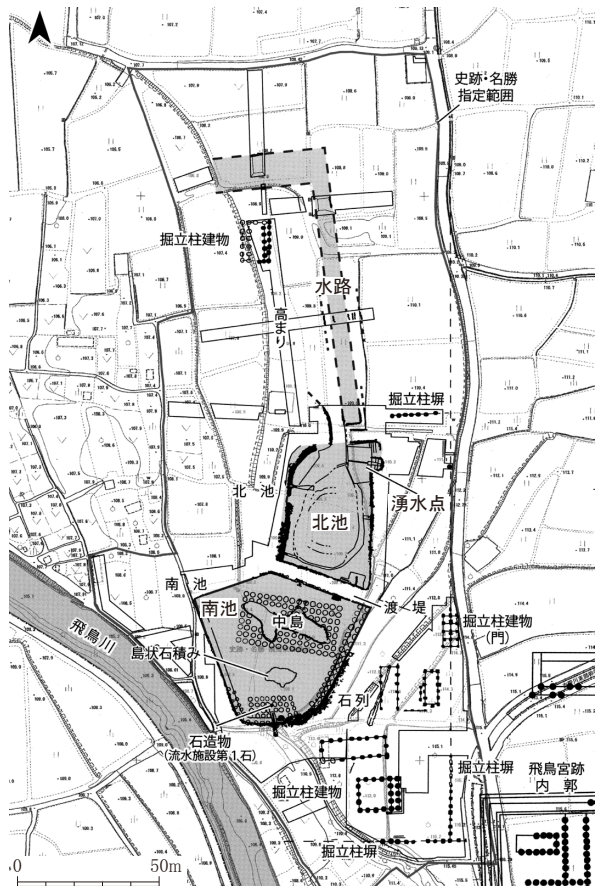
IV. 奈良時代の苑池—苑池の変容—

飛鳥時代に苑池を導入した日本は、強大な世界帝国である唐に友好国の百濟を滅ぼされ、その失地回復のため唐に挑んだが完敗し、内戦まで経験するという未曾有の国難に遭遇した。その国難を克服し、本格的な都城である藤原京を成立させ（今のところ苑池は確認されていない）、さらに平城京に遷都して、直接唐帝国と遣唐使の

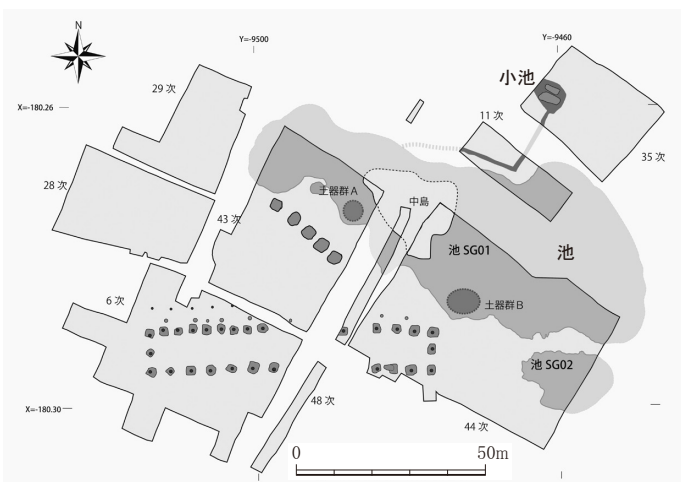
派遣を通じて交流を深めていく中で、権力基盤を盤石にし、本格的な苑池を展開させていった。

この時期の苑池の特徴は、飛鳥京跡苑池の要素と比較すると、以下のように、飛鳥時代の様相から徐々に変化していったと想定される。

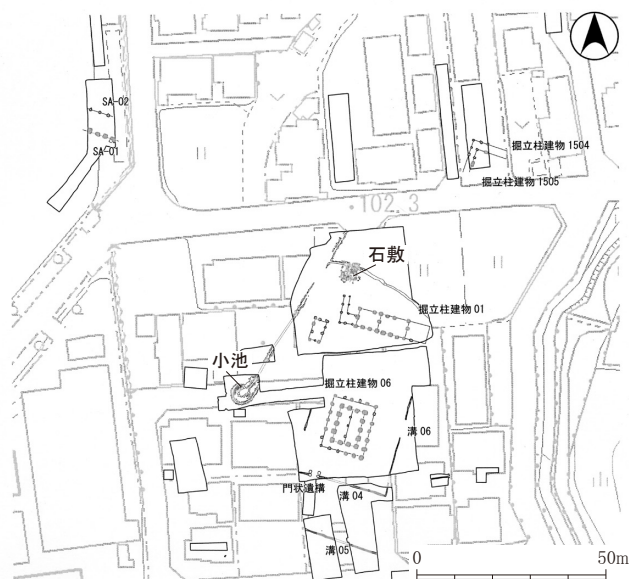
- ① 直線を基調とする方形池から、曲線を基調とし出入りのある岸边を有する曲池が主体となる。なお、平城宮東院庭園のように、池の形状が直線基調から曲線基調へ漸移的に変化したことに留意したい。
- ② 垂直石積護岸から、傾斜の緩やかな洲浜状石敷きを伴う護岸が主体となる。
- ③ 大型石造物の配置から、景石（自然石）を用いた石組・築山の配置が主体となる。
- ④ 中島も石積護岸から洲浜状石敷護岸が主体となる。
- ⑤ 湧水点を必ずしも表現しなくなる。ただし、平城京内の離宮に造営された白毫寺遺跡の苑池のように、古墳時代を彷彿とさせる、湧水点を利用した苑池がみられることには注意しておきたい。
- ⑥ 観賞用建物が固定化される。特に、8世紀後半になると施釉瓦葺建物などが増える。
- ⑦ 池中建物や橋状施設などの池上施設が増える。
- ⑧ 飛鳥時代同様、現状では奇禽珍獣はみられないが、馬、牛、猿、鶴などをあしらった遺物などの存在から、将来的には確認される可能性がある。
- ⑨ 珍奇な植物はみられないが、飛鳥時代同様の植栽がみられる。
- ⑩ 祭祀遺物や生産関連遺物が減り、宴遊遺物（舟形、賽子、独楽、琴など）、施釉陶器（唐三彩、奈良三彩、緑釉など）、ミニチュア建物などの華やかな遺物が増える。また、苑池の機能に関する墨書土器や木簡などの文字資料も増えた（菜園、相撲、雅楽、水精玉など）。なお、飛鳥時代同様、武器・武具や海老鉋などもみられた。また、釘を打ち込まれた人形などの人間の闇の部分を表す遺物もみられた。
- ⑪ 臨池伽藍の出現（8世紀後半）、樓閣山水図などの存在から、仏教や神仙世界の要素が明確化した。苑池の機能については、出土遺物のあり方から飛鳥時代と比べて変化もしたが、具体化もした。祭祀色が後退し、宴遊色（中国の園林文化の影響をうけた曲水宴など）



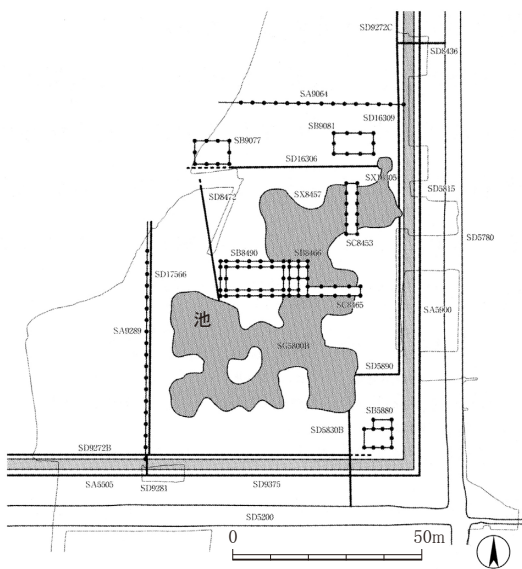
北池湧水点周辺拡大図
A-1 類 飛鳥京跡苑池



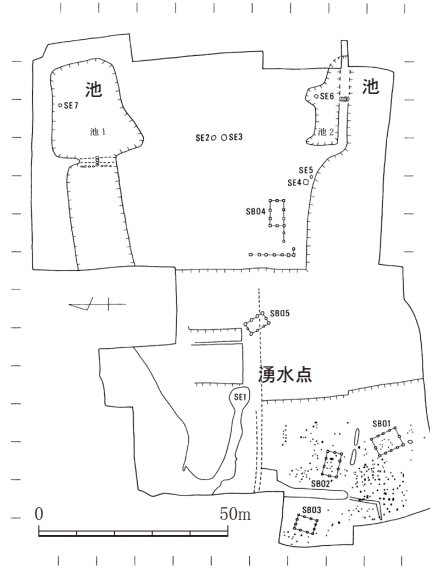
A-2 類 宮滝遺跡



A-3 類 上之宮遺跡



C-1 類 平城宮東院庭園



C-4 類 白毫寺遺跡

図3 古代苑池 (その2)

が大きくなり、華やかさも増した。その反対の人間の影や闇の要素も垣間見え、現代人の考える人間味あふれる古代庭園のイメージに近くなったと考えられる。

分布については、平城宮内各所、後苑とすべき広大な松林苑と苑内に点在する古墳（佐紀盾列古墳群）の周濠を再利用した苑池、平城京内各所に点在する離宮などの苑池だけではなく、京内の貴族の邸内の庭園（苑池）、法華寺阿弥陀浄土院で検出されたような浄土庭園の先駆的な庭園（苑池）、各地の国府に伴う苑池など、飛鳥時代と比べたら平城京を中心に数や密度が格段に増した。

また、基本的には曲池を中心とした類型（C類）になるが、いくつかは細分される（表1・2、図2・3）。

C-1類・宮殿・離宮・貴族邸・寺院内に位置し、曲池と建物からなる。東院庭園、宮跡庭園、長屋王邸、法華寺阿弥陀浄土院など。特に、寺院内の事例は平安時代以降の浄土庭園の先駆になると思われる。

C-2類・宮殿・離宮内外に展開する広大な曲池。佐紀池下層苑池、宮西南隅苑池、松林苑など。ただし、実態が不明なものが多い。

C-3類・古墳の周濠を再利用した曲池群。特に、松林苑周辺に点在。平塚2号墳、コナベ古墳など。

C-4類・湧水点を利用した曲池群。白毫寺遺跡など。

このように、飛鳥時代と比べたら、数が増しただけではなく、質も変化したことが分かった。それは百濟などからの間接的な中国苑池の受容から、唐からの直接的な受容（小野 2015）への変化を意味しているが、一方で古墳時代の湧水点祭祀場を彷彿とさせる苑池がみられることは、伝統性が完全に払拭されたわけではなく、伝統の上に新しい要素が重層的に追加されていった苑池が変容していったことをも意味していよう。その変容過程の中で、苑池空間が古墳時代のカミをまつるための空間から、徐々に人のための空間へと変化していったと考えられる。なお、この時期以降顕著化する景石（自然石）・築山などは、古墳時代以来の聖なる山（甘南備型）とそこに存在した磐座を取り込んだ可能性も想定できるので、検討課題である。

V. おわりにー日本庭園への道程ー

本中眞は、庭園における園外景観の眺望形式を基準に古代庭園を概観した（本中 1994）。古墳時代の祭祀儀

礼にまつわる水辺の修景技法¹⁵⁾をベースに、中国・韓半島からの仏教伝来に伴って作庭技法も伝来して、飛鳥時代に古代庭園が成立したが、そのときは外側の自然風景との景観対比はあまり意識されていなかった。奈良時代になり、都城の都市的街区の整備拡充とともに、人工的な庭園の外周の自然との景観的対比関係も意識されだしたが、それはあくまでも背景的效果を担うにとどまった。その動向は、平安時代の寝殿造住宅にも継続してみられた一方、浄土庭園では園外（山）の眺望が必要不可欠になったが、それはあくまでも宗教上の理由で、純粹に自然景観を觀賞するものではないと指摘された。園外の自然景観を純粹に觀賞するようになるには、多彩な庭園が展開した中世を経た近世の「借景」概念の確立を待たねばならなかったようだ。

筆者も、前回の展示と本稿を通じて、古墳時代の「水のまつり」の場が、磐座を伴う甘南備型の山から流れだす水を媒介にして、その山とともに、地域開発・統合の象徴として位置づけられ、飛鳥時代にあらたな権力装置として中国・韓半島の苑池を導入する際に、それら一連の施設をベースとして取り込んだと考えた。なお、飛鳥時代の苑池に仏教的要素などの新来の要素があまりみられなかった背景に、その伝統性が強かったことを想定した。次の奈良時代については、その伝統性を完全には払拭できなかったものの、それが弱まって中国的な苑池に近づいたと想定した。また、飛鳥時代までは一部で確認できた甘南備型の山・磐座との関係を、築山・景石として庭園（苑池）に取り込んだ可能性を指摘した。

よって、筆者は古墳時代の自然重視の地域経営の伝統が新来の苑池の導入・展開に伴って薄まっていったと考えたが、先述の本中の考えでは、庭園（苑池）は自然重視の度合いが近世へ向けて強まっていくことになる。

まだまだ考察しなければならないことは多いが、本稿での検討結果を踏まえて、次の平安時代の寝殿造住宅に伴う庭園や浄土庭園、中世の枯山水庭園、近世の茶庭、大名庭園、西洋の影響を受けた近代庭園を経て、現代の庭園まで射程に入れ、日本庭園とは何かについて考究したい。そして、本稿の課題でもあった古墳時代の甘南備型の山・磐座・湧水点（導水施設）を中心とする「水のまつり」の場の伝統がどのように現代に引き継がれていったかについてもみていきたい。なお、日本における苑

池の成立と展開には東アジア世界の苑池が大きく関与していることも本稿では指摘したが、ほとんど触れることができなかったのも、それも今後の検討課題である。

註

- 1) 「庭園」という用語そのものが近代の所産であるので(奈文研 2006 など)、展示でも用語には苦労した。本稿で詳述する余裕はないが、前稿(青柳編 2022)同様、本稿でも主に権力者の庭園を扱うので、古代東アジアの中心に位置する中国で、皇帝などの権力者が自らの拠点の近辺に構築した多目的施設としての庭園(菜園、果樹園、薬草園、軍事演習場、動物園、宴会場などを備え、管理施設、管理人が存在したとされる)は、「苑」と呼称される場合が多く(妹尾 2022)、日本でも『日本書紀』や『続日本紀』などの正史では宮廷施設に伴う庭園に、「苑」の語を使ったようである(金子 2002)。その「苑」は池を中心に構築される場合が多いので、本稿で扱う庭園も「苑池」と呼称することにする。なお、宮廷施設以外の「苑池」には、便宜上、宴遊・観賞目的の場合には「庭園」の用語を使うこととする。

ちなみに、中国後漢代の字書である『説文解字』では、「苑」とは「禽獸を養う所以なり」とあり(金子 2002)、鳥獸を飼う場所、すなわち動物園のような場所のことを指すようだ。
- 2) 古墳時代の庭状施設を古代庭園の起源とする見解は以前からあるが、穂積裕昌は詳細に研究史をひもとき、その妥当性を論じている(穂積 2012)。
- 3) もともと「管付槽」(服部遺跡)、「樋状木製品」(神並・西ノ辻遺跡)と呼称されていたが、槽と樋が一体化しており、長い形状を重視して「槽付き木樋」と呼称した(青柳 2019)。ただし、後述するように、飛鳥時代の石槽や石升が同一系譜に連なるとすると、槽を重視した呼称にすべきかもしれない。
- 4) 考古学的には両者とも祭祀遺跡に該当する。ただし、1. はカミまつりを実修する場所だが、2. はそうではないとされる場合がある(穂積 2012 など)。ちなみに、1. の城之越遺跡では奈良時代にも湧水点機能がしていたようであり、「庭」銘墨書土器が出土している。それは、湧水点周辺がカミをまつるための空間である「斎庭」に該当することを示唆しており、1. がカミまつりを実修し

た場所である蓋然性を高めてくれる。

- 5) なお、古墳の葺石についても古代庭園との関係性を評価しようとした見解もあった(堀口 1977)。
- 6) 百濟の苑池の最大の特徴は方形池の存在だが、類例が少ないので不明な点が多い。類例の増加を待って再検討すべきであろう。その点、百濟の影響をうけつつも、飛鳥地域のトータルデザインの中で飛鳥時代の方形池が成立したとの指摘は重要である(卜部編 2012)。
- 7) 曲池と分類する案もある(相原 2002)。
- 8) しかも、飛鳥京跡苑池北池の正面には、天神社跡の磐座群のある甘奈備型の岡寺山が見えているので、諸施設の配置面でも、先述したような古墳時代の地域開発・統合原理を踏襲していた可能性がある。
- 9) 苑池の重要な役割の一つに外交儀礼が挙げられるが、当時の日本は中国の先進的な体制を模範として古墳時代の体制から脱却しつつあったものの、推古朝(7世紀前葉)に隋の外交使節を受け入れた際の対応が象徴しているように、まだ大王(天皇)が古墳時代の「未開の王」から脱却できていないといえ(田島 1985)、それが飛鳥京跡苑池のあり方にあらわれていた可能性もあろうか。

また、新来の仏教色があまりみられないのも、同じ脈絡でとらえられようか。
- 10) なお、前期難波宮北西の谷部で検出された水利施設も石貼の湧水点と石組溝からなり、多量の祭祀遺物と生産関連遺物が出土しているので、広義の苑池に該当する可能性がある。今後は宮殿、官衙周辺で確認される可能性があるもので注視したい。特に、藤原宮周辺でみつかる可能性は高いと思われる。
- 11) 斉明朝(7世紀中葉)に築かれた酒船石遺跡の下流には、天武朝(7世紀後葉)になると官宮工場の飛鳥池遺跡に伴う方形池が造営される。それらが同時存在であれば、広義の苑池A-1類に分類されると考える。
- 12) 小池状遺構は、掛樋等で給水したと想定され、湧水はみられないが湧水点状遺構を意識した施設と想定される(奈文研 2006)。なお、島庄遺跡、宮滝遺跡ともに大型の須恵質土管がみられることも注目される。また、島庄遺跡では方形池が先行して造営され、小池が後から追加されたようである。
- 13) 小池状遺構は、苑池A-2類と似たような施設。石敷き状遺構は、その小池からのびる溝が貫通しており、池の

代わりとなる施設か。

- 14) 掛樋等で給水されたと想定される。なお、郡山遺跡では給排水溝が接続しているので、苑池A類になる可能性も考えられる。
- 15) 城之越遺跡のような古墳時代の「水のまつり」の場（湧水点祭祀場）で「曲池遺構」がみられることは、仏教公伝以前に、自然風景の模倣を構築意識の根底に据えて、石材で水辺を意匠しており、それが後代の庭園の祖形的意匠になったと指摘された（本中1994）。

引用・参考文献

相原嘉之 2002「飛鳥の古代庭園—苑池空間の構造と性格」『古代庭園の思想—神仙世界への憧憬』角川書店

青柳泰介 2003「導水施設考—奈良県御所市・南郷大東遺跡

の導水施設の評価をめぐって—」『古代学研究』第160号

青柳泰介 2019「古墳時代の導水施設に使用された槽付き木樋について」『古代学研究』第222号

青柳泰介 2021「近畿地方の「豪族（首長）居館」からみた金井下新田遺跡の囲い状遺構」『金井下新田遺跡≪古墳時代以降編≫分析・論考編』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

青柳泰介編 2022『宮廷苑池の誕生—飛鳥京跡苑池から日本庭園へ』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

卜部行弘編 2012『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池（一）』奈良県立橿原考古学研究所

小野健吉 2009『日本庭園—空間の美の歴史』岩波書店

小野健吉 2015『日本庭園の歴史と文化』吉川弘文館

小野健吉編 1988『発掘庭園資料』奈良国立文化財研究所

表1 苑池構成要素一覧【遺構】

遺跡名	府県名	時代	類型	甘南備型	磐座	水源	湧水点	槽・升	池形状	護岸	配石	中島	池上構造物	建物	文献
城之越	三重	古墳	1				○			貼石	石組			○	1
南紀寺	奈良	古墳	1				○			貼石		方形			2
南郷大東	奈良	古墳	2	○	?	?		○	方形池	貼石				覆屋	3
神並・西ノ辻	大阪	古墳	2					○	方形池	貼石				?	4
巢山古墳	奈良	古墳	i							貼石	立石	方形・曲線		?	5
津堂城山古墳	大阪	古墳	i							貼石		方形			6
脇本	奈良	古墳	ii							貼石		方形?		○	7
極楽寺ヒビキ	奈良	古墳	ii	○	?	?				貼石	立石	方形		○	8
東池尻・池之内	奈良	古墳	iii						曲池			?		○	9
飛鳥京跡苑池	奈良	飛鳥	A-1	○	○	?	○	○	多角形池	石積	噴水・石槽	曲線	栈敷	○	10
酒船石	奈良	飛鳥	A-1?				○	○	方形池?	石積					11
前期難波宮水利施設	大阪	飛鳥	A-1?				○			貼石				○	12
島庄	奈良	飛鳥	A-2				△		方形池	石積				○	13
宮滝	奈良	飛鳥	A-2	?			△		曲池			曲線		○	14
古宮	奈良	飛鳥	A-3				△		方形石敷	貼石				○	15
上之宮	奈良	飛鳥	A-3				△		方形石敷	石積				○	16
飛鳥宮跡内郭	奈良	飛鳥	B						曲池	洲浜?				○	17
石神	奈良	飛鳥	B						方形池	石積	須弥山石・石人			○	18
平田キタガワ	奈良	飛鳥	B						方形池	石積	猿石				19
坂田寺跡	奈良	飛鳥	B						方形池	石積				○	20
郡山	宮城	飛鳥	B?						方形池	石積				○	21
平城宮東院庭園	奈良	奈良	C-1				?		曲池	洲浜状	石組	曲線	橋・建物	○	22
平城京左2-2-12	奈良	奈良	C-1						曲池	洲浜状	石組			○	23
平城京左3-2-6(宮跡庭園)	奈良	奈良	C-1						曲池	洲浜状	石組			○	24
長屋王邸跡	奈良	奈良	C-1						曲池	洲浜状				○	25
法華寺阿弥陀浄土院	奈良	奈良	C-1						曲池	洲浜状	石組	曲線	橋・建物	○	26
平城宮西南隅苑池	奈良	奈良	C-2						曲池	洲浜状					27
松林苑(古墳再利用)	奈良	奈良	C-3						曲池	洲浜状	石組			○	28
白毫寺	奈良	奈良	C-4				○		曲池	洲浜状	石組			○	29

加藤真二編 2005『東アジアの古代苑池』飛鳥資料館
 金子裕之 2002「宮廷と苑池」『古代庭園の思想—神仙世界への憧憬』角川書店
 重見泰編 2014『飛鳥宮と難波宮・大津宮』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 鈴木一議 2022「飛鳥時代庭園の様相—飛鳥京跡苑池を中心に—」『上野三碑の時代—7・8世紀の都と東国』群馬県立歴史博物館
 妹尾達彦 2022「中国の宮廷苑池の系譜—隋唐長安・洛陽を中心に—」『宮廷苑池の誕生—飛鳥京跡苑池から日本庭園へ』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 田島公 1985「日本の律令国家の賓礼—外交儀礼より見た天皇と太政官—」『史林』68—3
 鶴見泰寿 2022「飛鳥京跡苑池から出土した木簡」『宮廷苑池

の誕生—飛鳥京跡苑池から日本庭園へ』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
 奈良文化財研究所 2006『古代庭園研究Ⅰ』
 穂積裕昌 2012『古墳時代の喪送と祭祀』雄山閣
 堀口捨身 1977『庭と空間構成の伝統』鹿島出版
 本中真 1994『日本古代の庭園と景観』吉川弘文館

図出典

図1—1類 青柳 2003 を一部改変
 —2類 奈良県立橿原考古学研究所 1995『奈良県遺跡調査概報 1994年度（第2分冊）』を一部改変
 図2、3 青柳編 2022 を一部改変

表2 苑池構成要素一覧【遺物】

遺跡名	府県名	時代	類型	動物遺存体	植物遺体	中・韓土器	施釉陶器・瓦	祭祀遺物	生産関連遺物	宴遊遺物	舟形	琴	水晶玉	海老錠	武器・武具	備考
城之越	三重	古墳	1		○	○		○								
南紀寺	奈良	古墳	1						○							
南郷大東	奈良	古墳	2	○	○	○		○	○		○	○	?		○	
神並・西ノ辻	大阪	古墳	2	○	○	○		○								
巢山古墳	奈良	古墳	i													水鳥形埴輪
津堂城山古墳	大阪	古墳	i													水鳥形埴輪
脇本	奈良	古墳	ii			○			○							
極楽寺ヒビキ	奈良	古墳	ii			○		○	○						○	
東池尻・池之内	奈良	古墳	iii			?										
飛鳥京跡苑池	奈良	飛鳥	A—1	○	○			○	○	○	○	○	?	○	○	木面?
酒船石	奈良	飛鳥	A—1?		○			?	?							
前期難波宮水利施設	大阪	飛鳥	A—1?			○		○	○		○					
島庄	奈良	飛鳥	A—2					○								大型土管
宮滝	奈良	飛鳥	A—2						○							大型土管
古宮	奈良	飛鳥	A—3													
上之宮	奈良	飛鳥	A—3		○			○	○			○				
飛鳥宮跡内郭	奈良	飛鳥	B													
石神	奈良	飛鳥	B			○	○	○	○	○	○				○	
平田キタガワ	奈良	飛鳥	B													
坂田寺跡	奈良	飛鳥	B													
郡山	宮城	飛鳥	B?													
平城宮東院庭園	奈良	奈良	C—1		○	○	○	○	○	○	○					ミニ建物
平城京左2—2—12	奈良	奈良	C—1				○						?			
平城京左3—2—6 (宮跡庭園)	奈良	奈良	C—1		○		○							?		
長屋王邸跡	奈良	奈良	C—1	△			○	○	○	○	○			○	○	楼閣山水図、ミニ建物
法華寺阿弥陀浄土院	奈良	奈良	C—1				○									
平城宮西南隅苑池	奈良	奈良	C—2							○					○	木面、釘打ち人形
松林苑(古墳再利用)	奈良	奈良	C—3				○	○								
白毫寺	奈良	奈良	C—4				○	○								

表参考文献

1. 三重県埋蔵文化財センター 1992『城之越遺跡』
2. 奈良市教育委員会 1995『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』ほか
3. 奈良県立橿原考古学研究所 2003『南郷遺跡群Ⅲ』
4. 松田順一郎 1997「東大阪市神並・西ノ辻遺跡の古墳時代水利遺構」『王権祭祀と水』帝塚山考古学研究所、ほか
5. 広陵町教育委員会 2005『出島状遺構 巢山古墳調査概報』学生社
6. 藤井寺市教育委員会 1993『新版 古市古墳群』ほか
7. 奈良県立橿原考古学研究所 2015『脇本遺跡Ⅲ』
8. 奈良県立橿原考古学研究所 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』
9. 飛鳥資料館 2016『飛鳥の考古学 2015』ほか
10. 奈良県立橿原考古学研究所 2012『史跡・名勝 飛鳥京跡苑池（一）』
11. 明日香村教育委員会 2020『酒船石遺跡発掘調査報告書』
12. (財)大阪市文化財協会 2000『難波宮址の研究第11』
13. 河上邦彦 2006「飛鳥嶋宮推定地の調査」『古代庭園研究Ⅰ』奈良文化財研究所、ほか
14. 奈良県立橿原考古学研究所 1996『宮滝遺跡Ⅰ 遺構編』
15. 奈良国立文化財研究所 1976『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』
16. 桜井市教育委員会 1989『奈良県桜井市 阿部丘陵遺跡群』
17. 奈良県立橿原考古学研究所 2005『飛鳥京跡Ⅲ』
18. 西口壽生 2006「明日香村飛鳥所在石神遺跡の「庭園遺構」」『古代庭園研究Ⅰ』奈良文化財研究所、ほか
19. 奈良県立橿原考古学研究所 1990『奈良県遺跡調査概報 1987年度（第1分冊）』
20. 奈良国立文化財研究所 1973『飛鳥・藤原宮発掘調査概報3』ほか
21. 仙台市教育委員会 1996『郡山遺跡XVI—平成7年度発掘調査概報一』
22. 奈良国立文化財研究所 2003『平城宮発掘調査報告XV—東院庭園地区の調査一』
23. 奈良市教育委員会 1997『平城京左京二条二坊十二坪』
24. 奈良国立文化財研究所 1986『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』
25. 奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊—長屋王邸・藤原麻呂邸の調査一』ほか
26. 奈良国立文化財研究所 2000『奈良国立文化財研究所年報 2000-Ⅲ』ほか
27. 奈良国立文化財研究所 1982『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』ほか
28. 奈良国立文化財研究所 1975『平城宮発掘調査報告Ⅵ』ほか
29. 奈良県立橿原考古学研究所 1983『奈良県遺跡調査概報 1982年度（第1分冊）』